

「17年目の秘密」

第6話 「複雑な関係」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島	春樹	夏希	倫子	利枝子	真由子	哲男	真実	亮	藤原	川村	牧	永井	渡辺	松野	同級生	〃	〃	奈々
たにしま	はるき	なつき	のりこ	りえこ	まゆこ	てつお	まみ	りょう	ふじわら	かわむら	まき	ながい	わたなべ	まつの	同級生	〃	〃	なな
（17）	（17）	（20）	（17）	（17）	（17）	（48）	（0）	（17）	（17）	（17）	（17）	（17）	（45）	（50）	（50）	（17）	（17）	（17）
中央高校全日制二年生	姉、キャバ嬢	無職	未婚の母	父、医者	娘、赤ん坊	中央高校全日制二年生	兄、会社員	母、専業主婦	滝雀学園高校二年生	滝雀学園高校二年生	父、会社員	継母、専業主婦	実母、出版社編集長	中央高校全日制教師	中央高校全日制二年生	中央高校全日制二年生	中央高校全日制二年生	中央高校全日制二年生

畑はた 光こうま
岡おか ど

薫かおる
(47)

平へいか
(4) (21)

養護施設園長

まどかの息子

公園の女性

1 中央高校・全景

2 同・廊下

春樹が歩いている――利枝子が反対側から歩いてくる。お互い、存在に気づき、一瞬目が合うが、すぐ反らして去っていく。

3 公園

真実をベビーカーに乗せた真由子が歩いている。

真由子「(真実に) 真実も、もう少し大きくなったら、ママやジイジと一緒に遊ぼうね」

と、ベビーカーの前に小さなサッカーボールが転がってくる。

ベビーカーを止めて、真由子はそのサッカーボールを拾う。

と、四歳ぐらいの男の子が、歩いてくる。

真由子「(男の子に) これ、君の？」

と、奥のほうから男の子の母親らしき
声が聞こえてくる。

女性の声「光平、ダメでしょ勝手にいなくな
っちゃ」

真由子「(男の子に)お母さんかな？」

と、二十代前半の女性が歩いてくる。

女性「(真由子に)すみません。息子が勝手に
に」

真由子「いえ。お子さんですか？」

女性「そうなんです。今年で四歳になるんで
す」

真由子「若いお母さんですね。私、てっきり
弟かと思いました」

女性「まあ、高校を辞めて、十七歳でこの子
を生んだので」

真由子「十七歳ですか……」

女性「ええ……まあ、いろいろ事情があつて
ね……」

真由子「……実は、私もなんです」

女性「え？」

真由子「私、今年十七になるんですけど、二ヶ月前に、この子を産んだんです」

女性「そうだったの……」

真由子「私も、付き合っていた彼氏と別れて、この子を産みました。それに、うちは父子家庭で、父もほとんど家にいないので、今はこの子を育てることを生きがいにしてるんです」

女性「……」

真由子「あ、ごめんなさい。（と苦笑して）こんな話するつもりなかったんですけど……」

女性「良いの。よく、この公園には来るの？」

真由子「ええ。家がこのすぐ近くにあるので」

女性「そう。私、まどかって言います。また、

この公園であつたら、声かけてね」

真由子「はい。私、真由子って言います。そして、この子は真実です」

まどか「真実ちゃんか……。うちの息子とも、仲良くしてあげてね。（と光平に）ほら、

お姉ちゃんにご挨拶は」

恥ずかしがっている光平。

まどか「ごめんなさい。この子は光平。今年で四歳になるの。よろしくね」

真由子「はい」

笑顔で頷くまどか。

4 中央高校・新聞部室

春樹が、パソコンで原稿を書いている

——時折、肩を回したり、首を回したりしている。

と、ドアが開き、亜沙美が入ってくる。

亜沙美「頑張ってる？」

春樹「なんだ、来てたんだ。あれ、今日部活？」

亜沙美「ううん」

春樹「じゃあどうして？」

亜沙美「春樹の様子見に来たの」

春樹「嬉しいこと言ってくれるじゃん。でも

残念。おだてたって、何にも出ないよ」

亜沙美「別に求めてないし」

春樹「じゃあ、出校日の日に、そのまま学校に残って作業してる俺の様子を、わざわざ見に来てくれたってこと？」

亜沙美「うん」

春樹「嘘だね」

亜沙美「ホントだって」

春樹「信じちゃっても良いの」

亜沙美「ご自由にどうぞ」

春樹「まあ良いや。(と笑うと)ちよつとトイレ行ってくるから、荷物番頼むね」

と、出ていく。

寂しそうな顔をする亜沙美――やりきれないように春樹の椅子に座る。

5 宮田家・居間（夜）

浩輔が来ており、真由子と夕飯を食べ
ている。

浩輔「夕飯呼ばれるために来たんじゃないんだけどな」

真由子「分かってる。でも、浩輔のところだ

って、お母さんが入院してて、家のことする人いないんでしょ。夕飯の支度だって」
浩輔「父親も兄貴もいるんだ。別に困らないよ。コンビニの弁当とか、カップ麺とか、いくらだって食べるのには苦労しないんだから」

真由子「そういう問題じゃないでしょ。ちゃんとご飯は食べなきゃ。とても男三人じゃ、まともな暮らしできないでしょ」

浩輔「急にどうしたんだよ、そんな母親みたいな言い方して」

真由子「私はもう母親だからね」

浩輔「けど、前の真由子とは大分違う気がする。何かあったか？」

真由子「特に、私の暮らし方は変わらないけど、まあ唯一変わったことといえば、ママ友ができたことかな」

浩輔「へえ」

真由子「公園で会った人なんだけどね。私と一緒に、男に捨てられて、十七のときに子

ども産んだんだって」

浩輔「真由子と全く一緒じゃん」

真由子「そう。だから、一気に仲良くなってね。私が真実を散歩がてら公園に連れてくと、ここ最近よく見かけるようになって、いろいろおしゃべりしたりしてるの」

浩輔「世の中には、いろんな母親がいるからな」

真由子「まどかさんって言うんだけど、その人もその人で一生懸命母親やってるの。血が繋がっていないのに、本当の子どものように可愛がってくれる旦那さんもいるみたいで。ちよつと、まどかさんのことが羨ましくなった」

浩輔「……やっぱり、父親の存在って大きいか」

真由子「私自身がそうだからね。母親と別れて、男手一つで私を育ててくれたでしょ。片親しかいないっていうのは、子どもとしては辛い。だから、例え血が繋がって

いなくても、真実には『お父さん』って呼ばれる存在は必要かなって思っちゃって……」

浩輔「……」

真由子「もし見つからなかったら、その時だよ。どんなことになっても、真実は私の子どもなの。まどかさんに負けちゃいられない。私も、母親としてはまだまだこれからなんかもん」

浩輔「羨ましいな、真由子が」

真由子「え？」

浩輔「どんなに辛い過去があっても、そうやって強い気持ちで奮闘できるものがあるんだから」

真由子「……」

浩輔「応援してるから」

真由子「うん。ありがとう」

と、真実が目覚めて、泣き出す。

浩輔「起きちゃったな」

真由子、真実の元に行き、抱き寄せる

と、優しくあやしていく。

浩輔、そんな真由子を見て、微笑んでいる。

6 永井家・居間

和哉が来ており、仏壇に手を合わせている――側に聡実。

聡実「ありがとう。覚えてくれてて。うちの親なんか、今日が命日だってこと、忘れてると思う。今朝も、何にも言わずに出かけて行ったし」

和哉「そっか……」

と、インターホンが鳴る。

聡実「はいい。(と和哉に)春樹たちかな」
と、出ていく。

7 同・玄関

聡実が出てくると、ドアを開ける。

と、聡実の実母・渡辺悦子(45)が、立っている。

悦子「聡実、久しぶり」

聡実「お母さん……（と驚く）」

タイトル

『第6話 複雑な関係』

8 永井家・居間

聡実に伴われて、悦子が入ってくる。

聡実「（和哉に）お母さんが来た」

和哉「えッ……？」

聡実「（悦子に）お母さん、紹介するね。和哉君って言って、中学からの友達なの。高校も今、クラスが一緒なの。今日、お姉ちゃんの日だから、線香をあげに来てくれたの」

和哉「（悦子に）初めまして、牧和哉です」

悦子「聡実の母親……いや、元母親の、渡辺

悦子と言います。（と名刺を出す）」

和哉「（名刺をもらい）この出版社って、ファッション雑誌で有名なところですよね。

そこの編集長なんですか？」

悦子「ええ、まあ。ですから、ヨーロッパ地方に行くことが多くて、昔から聡実にも迷惑をかけてました。今日は、直実のために来ていただいて、ありがとうございます。直実も喜んでと思います。（と聡実に）お父さんたちは？」

聡実「お父さんは仕事。富美代さんは、パートに出かけた」

悦子「だって、今日は直実の命日でしょ。それに、今日で三回忌。二ヶ月間、ずっとフランスにいたから、法事には間に合わないと思ったから、せめて命日でもお父さんと話そうと思ったのに、何考えてるのかしらね」

聡実「一応、三回忌の法事はやったよ。でも、一周忌の時と同じで、お母さんには電話の一本も行かなかったんだ」

悦子「お父さんも何考えてるのかしらね。まあ、元々家族のことは、全部私の責任にし

てたような人だから、しょうがないか。そう思うと、離婚して正解だったかもしれないわね。直実が亡くなったとき、既にお父さんは浮気をしてたわけだし、本当に最低な男だったわ」

和哉「……」

悦子「あら、ごめんなさいね。お客さんの前でこんなこと……」

和哉「いえ。聡実から、話は聞いてます」

悦子「この三年間、聡実には可哀想な思いをさせてしまったって思ってるの。これまで何度か、聡実とは連絡を取り合ってたけど、改めて考えると、この三年間、聡実はこの家でよく耐えたなって思うの」

聡実「……」

悦子「聡実、また何かあったら、連絡して。いつでも会いに来るから」

聡実「母さん……」

難しい顔のままの和哉。

9 養護施設 “ひまわり園” ・事務室

春樹が座って待っている。

と、ドアが開き、園長・畑岡薫（60）が入ってくる。

薫「春樹君、久しぶり」

春樹「（立ち上がり）ご無沙汰してます。相変わらず、お元気そうで」

薫「まあ、毎日もたちの笑顔を見てるからね、お陰様で元気にやってるわよ。ま、座って」

春樹「はい（と座る）」

薫も座ると、

薫「今日は、どうしたの？ 久しぶりに、子どもたちの顔でも見に来た？」

春樹「まあ、それもあるんですけど」

薫「あ、夏希ちゃん、元気にしてる？ あと、倫子ちゃんも。倫子ちゃん、結婚したって。う話は聞いたけど、仲良くやってるのかしら」

春樹「そのことなんですけど……」

いぶかしそうに春樹を見る薫。

春樹「倫子、いろいろあって離婚して、今一
緒に暮らしてるんです」

薫「（驚いて）そうだったの」

春樹「姉も姉で、最近は全然顔を合わせてな
いんです。知人のところで居候してるみた
いで」

薫「じゃあ、今住んでるところの家賃とかは、
どうしてるの？」

春樹「支払いの時期になると、姉が家賃だけ
を持ってきて、また帰っていくんです。こ
こ数ヶ月はそんな感じですよ」

薫「ここを出て行って、幸せに暮らしていると
ばかり思ってたのに、それぞれにみんな事
情を抱えてるのね……」

春樹「まあ、それなりに……。倫子とは、本
当の家族のつもりで今でも暮らしています。
その中で、倫子が働きに出ようと職探しを
してるんですが、これがなかなか見つから
なくて……。それで、どうしても薫先生に

お願いがあつて」

薫「……？」

春樹「倫子を、ここで雇ってほしいんです」

薫「……」

春樹「ご無理は承知です。でも、倫子にとっては、生まれ育ったこの『ひまわり園』でなら、薫先生や、他にも気心の知れた親しい方もいるので、働きやすいと思うんです」

薫「春樹君……」

春樹「一度よくお考えいただいて……。お願いします」

と、立ち上がると深々と頭を下げる。

難しい顔の薫。

いつまでも頭を下げている春樹。

10 墓地（夜）

会社帰りの滋郎が、墓に向かつて手を合わせている。

滋郎「直実。今日で三年だな。父さん、お前が生きている間は、父親らしいことなんて、

何一つしてやれなかった。あれから、毎日
ずっと通ってるが、どうもまだ、直実がこ
の世のどこかにいるような気がするんだ。
まあ、こんな非現実的なこと言っても、
しようがないんだけどな。また来るよ」
と、去っていく。

11 ファーストフード店

亜沙美と奈々が、ハンバーガーやポテ
トを食べている。

奈々「ねえ、最近何かあった？」

亜沙美「何が？」

奈々「何だか、最近亜沙美元気ないような気
がして」

亜沙美「夏バテだよ、多分。心配しすぎだっ
て」

奈々「本当に？」

亜沙美「うん」

奈々「なら良いけど……」

亜沙美「……」

と、奈々の携帯電話が鳴る。

奈々「あ、剛士からメールだ」

亜沙美「剛士から？ 何かあったの？」

奈々「事後報告になるけど、実は、私たち付き合い始めたの」

亜沙美「えッ、マジで？ いつから？」

奈々「三週間前かな。もう少しで一ヶ月」

亜沙美「全然知らなかった……」

奈々「ごめんね、黙ってて。まだ、誰にも言っていないんだけど、二学期が始まったら言うつもりなの」

亜沙美「……」

奈々「（気まずそうに）本当は、この間の出校日で言うつもりだったの。けど、春樹と利枝子のことがあったって、言うタイミングがなかったから……」

亜沙美「そうなんだ。二人とも芝居上手いんだから」

奈々「亜沙美だって、好きな人いるでしょ？」
亜沙美「……そりゃ、私だって……。でも、

告白できるタイミングがなくてき……。メルで告白する人もいるけど、やっぱり直接告白したほうが良いじゃん」

奈々「まあ、それもそうだよね」

亜沙美「奈々は、どうやって告白したの？」

奈々「私は、電話で告白したの。とても、直接顔を合わせて告白なんて、そんな大それたことできないから」

亜沙美「そっか……」

奈々「今のうちに青春しないと、高校生活もつたいなくなっちゃうよ。勇気振り絞って、亜沙美も好きな人に告白しちゃいなよ」

曖昧にうなづく亜沙美。

12 街

亜沙美が難しい顔をして歩いている――

――脳裏に奈々の声がよみがえる。

奈々の声「今のうちに青春しないと、高校生活もつたいなくなっちゃうよ。勇気振り絞って、亜沙美も好きな人に告白しちゃいな

よ」

亜沙美「……」

×

×

×

〈フラッシュ〉

中央高校の新聞部室。

春樹「嬉しいこと言ってくれるじゃん。でも

残念。おだてたって、何にも出ないよ」

×

×

×

亜沙美「……」

13 墓地

滋郎が、墓に向かって手を合わせている。

と、花束を持った悦子がやってくる。

悦子「あなた……」

滋郎「（ハツと驚いて）悦子……」

悦子「どうして、ここに」

滋郎「娘の墓参りに来るのに、理由なんてな

いだろ」

悦子「いつから……？」

滋郎「納骨が済んでから、ずっとに決まってるじゃないか。直実は、俺たちにとって最初に生まれた娘だぞ」

悦子「……」

滋郎「日本に帰ってたんだな」

悦子「まあね。と言つても、一時帰国みたいなもんよ。いつまた海外に行くことになるかわからないからね。だから、日本に帰ってきたときぐらいは、こうして直実に会わないと、寂しいと思ったから」

滋郎「相変わらず、忙しいんだな。聡実は、俺が引き取って正解だったかもしれないな」

悦子「よく言うわよ。私と離婚してすぐに浮気相手と再婚して、その女を母親って呼ばなきゃいけないくなる聡実の気持ちも考えなさいよ」

滋郎「……」

悦子「再婚のこともそうだけど、聡実から聞いたら、直実の一回忌も三回忌もやらなか

ったそうね。それに、命日以外にしても、
普段仏壇には見向きもしないそうじゃない。
それが、聡実から嫌われてる理由だっ
てことが分からないの？」

滋郎「聡実には、どう思われても良いんだ。
嫌われるようなことをしたことは、自分が
よく分かってる。それでも、富美代に反抗
すると、俺が怒鳴ってしまうこともあるん
だ」

悦子「あなたと聡実との亀裂は、いつになっ
たら修復するのかしらね。聞いたけど、仏
壇にも手を合わせないんでしょ。聡実の前
で、直実を思っているような姿見せないと、
いつまでもこんなことが続くのよ。いい加
減、自分がどうすれば良いか、考えなさい
よ」

無言のまま立ち去っていく滋郎――陰
しい顔で、その後ろ姿を見つめる悦子。

15 同・愛子の病室

ノック音がして、スーツ姿の哲男が入ってくる。

哲男「失礼します」

ベッドで眠っている愛子が、見迎える。

愛子「まあ、宮田さん」

哲男「お身体の方は、いかがでしょうか？」

愛子「まあ、何とか」

哲男「そうですか」

と、ドアが開き、謙輔が入ってくる――
――哲男を見ると、軽く会釈する。

愛子「浩輔の同級生のお父さんよ」

哲男「(謙輔に)初めまして。宮田と言いま
す」

謙輔「もしかして、ここの病院を紹介してく
れたっていう……」

哲男「ええ」

愛子「どういうこと？」

謙輔「あ、おふくろには言ってなかったな。

ここの病院は、宮田さんが紹介してくれたんだよ」

哲男「浩輔君に、頼まれましたね。アルコール依存症を治療できる病院はないかと」

愛子「浩輔がですか？」

哲男「ええ。たった一人の母親の病気を何とか治してあげたいと、浩輔君は思ってたんでしょうね。浩輔君も仕事をしているようですから、私となかなか予定が合わないの、娘を通じて、資料を渡したりして、連絡は取り合ってたんです」

愛子「浩輔が、そんなことを……」

哲男「母親が病気になれば、見舞いに来てくれたり、病院を探そうとしてくれたり、良い息子さんをお二人もお持ちで羨ましいですよ」

愛子「……」

謙輔「(哲男に) 浩輔から話は聞いていますが、病院の先生をされてるとか？」

哲男「ええ。今日は、ここで学会があったの

で、浩輔君のお母さんが入院をしていることを思い出して、見舞いに」

謙輔「それは、わざわざご丁寧」

哲男「アルコール依存症は、治療をすれば必ず治ります。一日も早く、病気が完治することを、一人の医者として、お祈りしております」

愛子「ありがとうございます」

頭を下げる謙輔。

優しく微笑む哲男。

16 中央高校・全景

雷が鳴って、雨が強く降っている。

17 同・新聞部室

春樹、入る——既に亜沙美が来ており、

春樹に向かって振り返る。

春樹「あれ、今日も来てたの。(と帰り支度をしながら)今日はもう帰らないと。この雷じゃ、もっと雨強くなるよ」

亜沙美「うん……」

春樹「何かあった？」

亜沙美「いや、そういうわけじゃないんだけ

ど……」

春樹「じゃあ、早く帰ろう」

と、大きな雷が鳴る。

亜沙美、耳を塞いで慌ててしやがみ込む。

春樹、亜沙美に寄り、

春樹「大丈夫？」

亜沙美、春樹を見つめる。

春樹「やっぱ、雷は苦手だね」

再び雷が鳴る。

春樹に抱き付くような態勢になる亜沙美。

一瞬、動揺する春樹。

春樹「亜沙美……？」

亜沙美「春樹……」

春樹「……？」

亜沙美「今日は、春樹に相談したいことがあ

つて来たの」

春樹「相談って……？」

亜沙美「ううん。やっぱり、今度話す」

と、立ち上がろうとする。

春樹「どうして。(と亜沙美を引き留めると)

いずれ話すんだったら、今話しなよ。その

つもりで来たんでしょ？」

亜沙美「……」

春樹「(いぶかしそうに) 亜沙美……？」

亜沙美「……春樹」

春樹「……？」

亜沙美「私、春樹のことが好きッ」

春樹「(啞然と) 亜沙美……」

亜沙美、慌てて立ち上がり、

亜沙美「私、本気だからね」

春樹「……」

亜沙美「同居してるっていう女の人のことを

どう思ってるのか知らないけど、別に好き

なわけじゃないんでしょ」

春樹「それは……」

亜沙美「今すぐに返事欲しいなんて言わない。
ただ、私は本気だから、真剣に考えてほしいの」

春樹「どうして……急にそんなこと……」

亜沙美「何事に対しても熱心な春樹が好きになったの。奈々が剛士に告白して付き合いだしたように、私も春樹に告白するの」

春樹「奈々と剛士が、付き合ってるッ……!？」

亜沙美「奈々に言われて、ようやく決心がついたの。好きな人には、やっぱり直接告白しなきゃって」

春樹「……」

亜沙美「じゃあ、また……」

春樹「亜沙美ッ」

と呼び止めようとするが、出ていってしまいう亜沙美。

呆然と立ち尽くす春樹。

18 同・廊下

亜沙美が歩いている——その顔は、動

揺しているような難しい顔である。

19 宮田家・居間（夜）

真由子と哲男が夕飯を食べている。

哲男「今日、浩輔君のお母さんの見舞い行ってきたよ」

真由子「そう」

哲男「担当医の先生にも聞いたんだが、少しずつだが、快方に向かつてるようだ」

真由子「良かったね」

哲男「医者としては、患者が元気になることほど嬉しいことはないからね。見舞いに行つて良かったよ（と笑う）」

真由子「……ねえ、お父さん」

哲男「なんだ？」

真由子「お母さん、今、どうしてるかな？」

哲男「真由子……？」

真由子「別に、会いたいわけじゃないの。ただ、何となく気になって」

哲男「男と一緒に海外に行つて、楽しく暮ら

してるだろ。もう、俺たちのことなんか忘れてるよ」

真由子「ごめん、急に……」

哲男「良いんだよ。やっぱり、母さんのことが忘れられないか」

真由子「子どもから見ると、やっぱり母親の存在って大きくなって思うようになってさ」

哲男「真実を産んで、お前も母親の気持ち分かるようになってきたか」

真由子「まあね。子どもにとって、一人の親の存在って大きいと思ったの。それが父親でも母親でも、どちらか片親がいるだけで、子どもって安心できるんだろなって」

哲男「母さんは、父さんと真由子を捨てた。父さんだって、お前のために再婚しようと考えたし、山梨のおじいちゃんやおばあちゃんにも再婚を勧められた。でも、やっぱり真由子にとって母親は一人だと思ったから、再婚は絶対しないって決めたんだよ」

真由子「私も、正直もう少し大人になったら、
結婚しようって思ってた」

哲男「真由子ッ……」

真由子「でも、真実のために、生涯独身でも
良いって思ってるの。だって……」

哲男「どうした……？」

真由子「やっぱ、何でもない」

哲男「何だよ、気になるじゃないか」

真由子「良いの、忘れて」

と、苦笑している真由子である。

20 アパート・谷島家・居間

春樹が洗濯物を畳んでいる——ふと、
手を止めて、台所で食器洗いをしてい
る倫子の後ろ姿を見ると、亜沙美との
ことが脳裏に蘇る。

21 中央高校・新聞部室（回想）

しゃがみ込んでいる春樹と亜沙美。

亜沙美「私、春樹のことが好きッ」

春樹「(唾然と) 亜沙美……」

亜沙美、慌てて立ち上がり、

亜沙美「私、本気だからね」

春樹「……」

亜沙美「同居してるっていう女の人のことを

どう思ってるのか知らないけど、別に好き

なわけじゃないんでしょ」

22 アパート・谷島家・居間(回想戻り)

倫子の後ろ姿を呆然と見つめている春

樹。

春樹「……」

倫子、春樹の視線に何となく気が付い

て、振り返る。

ハッと我に返る春樹。

倫子「(不思議そうに) どうしたの？」

春樹「(慌てて) いや、何でもない……」

倫子、春樹のところまでやって来ると、

倫子「ねえ、最近春樹変だよ」

春樹「そう？」

倫子「ついこの間までは、バイト行くか、学校行くかなのに、最近学校行ってなくな
い？」

春樹「（苦笑して）ずっと学校行ってたら、夏休みの意味がないでしょ。俺だって、たまには家でゆっくりしたいんだから」

と、洗濯物を箆笥にしまい始める。

倫子「……クラスメイトの亜沙美って子と、何かあったんでしょ」

ハッと動揺して、慌てて倫子に振り向く春樹。

春樹「どうして……」

倫子「この間、ここに来たの」

春樹「！」

倫子「と言っても、用件言ったらすぐに帰っちゃったんだよ。ちょうど、春樹がバイトに行ってて、留守にしてたときなんだけどね」

ドアのノック音がして、倫子がやってくる。

倫子「春樹、帰ってたの？」

と、ドアを開ける。

亜沙美が立っている。

一瞬、いぶかしそうな顔で亜沙美を見る倫子。

倫子「どちら様ですか？」

亜沙美「私、春樹のクラスメイトの亜沙美つて言います」

倫子「ああ、春樹の」

亜沙美「私、この間春樹に告白しました」

倫子「えッ……」

亜沙美「あなたは春樹を独り占めしてるつもりかもしれませんが、そんなことさせませんから」

倫子「私、そんなつもりで……」

亜沙美「だったら、どうして赤の他人が、一緒に住んでるんですか？」

倫子「それは……」

亜沙美「春樹を、自由にさせてあげてください。このままじゃ、春樹が可哀想です」
倫子「……」

亜沙美「では、これで失礼します」
と、足早に去っていく。
呆然と立ち尽くしている倫子。

24 同・同・居間（回想戻り）

啞然と倫子を見ている春樹。
苦笑している倫子。

春樹「そうだったんだ……」

倫子「ごめんね、黙ってて……」

春樹「いや……別に……」

倫子「春樹の好きなようにしたら良いよ。私のことは、何にも気にしなくて良いから」
春樹「倫子……」

優しく頷く倫子。

25 永井家・居間

聡実、滋郎、富美代が朝食を食べてい

る——滋郎、時計を見ると、鞆を持って出ていく。

富美代「あら、もう出かけるの？」

滋郎「ああ。ちよつと、早く行かなきゃいけないことがあってね」

富美代、背広を滋郎にかけてやる。

玄関に向かう滋郎と富美代。

聡実も、時計を見ると出かける支度をする。

26 同・玄関

靴ベラを使って、靴を履いている滋郎。

富美代、鞆を渡すと、

富美代「行ってらっしゃい」

滋郎「行ってきます」

と、出ていく。

聡実も出てくると、富美代を避けるように、足早に出ていく。

富美代「行ってらっしゃい」

聡実、返事も返さずに、ドアを閉める。

寂しそうな富美代の顔。

27
道

滋郎が歩いている——その後を、聡実が携帯電話で音楽を聴きながら、歩いていく。

滋郎、途中の道を曲がっていく——聡実、いぶかしそうな顔になり、イヤホンを外すと、ゆっくりと滋郎の後を追っている。

28
墓地

滋郎がやってくると、墓に手を合わせている——木の陰から、その様子を感じと見ている聡実。

滋郎「(墓に)おはよう、直実。今日もいつも通り仕事だよ。とりあえず回れるところだけでも回らないと、営業なんてできないんだよ。聡実も最近、家にいないことが多い。なかなか、家族との時間って作れない

いもんだな。今日も見守ってくれよ」

と、去っていかうとする。

その前に立ち塞がる聡実。

ハツとする滋郎——冷静な顔の聡実。

29 道

聡実と滋郎が話している。

聡実「父さん、ちゃんとお姉ちゃんのこと考えてたんだね」

滋郎「当たり前だろ。直実が亡くなったときは、責任を全部母さんに押しつけたこともあつたが、今考えてみたら、俺にだって責任はあつたんだ。それなのに俺は……」

聡実「……」

滋郎「母さんと離婚して、富美代と一緒になつたことで、聡実が父さんたちを恨んでいることはもちろん分かってる。こんなことで責任を果たしたとは思っていない。母さんとも離婚したから、せめてお前とだけやり直したいと思ってる」

聡実「……それはできない」

滋郎「聡実ッ……」

聡実「だったら、富美代さんと別れてよ。私のお母さんは一人なんだから」

黙ってしまおう滋郎。

30 中央高校・二年A組教室

春樹が席に座り、教科書を読んでいる。

と、剛士と奈々が、仲良さげに登校してくる。

春樹「(剛士と奈々に)おはよう。すっかり

お似合いの二人になったね」

剛士「え、誰から聞いたの？俺たち、まだ

春樹に話してないよな。(と奈々に)な、

言っていないよな？」

奈々「言っていないよ。夏休みの間、ほとんど会ってなかったんだもん」

剛士「そうだよな。(と春樹に)誰から聞いたんだ？」

春樹「俺は、新聞部の部長だよ。学校にいる

とね、いろんな情報が耳に入ってくるの

(と笑う)

剛士「誰が話したか知らないけど、春樹にはちゃんと今日話すつもりだったんだよ。二学期が始まったたら、なるべくクラスのみんなに報告しようって」

春樹「そうだったんだ。でも、良いと思うよ。」

おめでとう」

剛士と奈々「ありがとう」

と、亮と亜沙美が話しながら登校してくる。

亮「(亜沙美に) そうか。返事待ちなら、しようがないな。最悪、自分から返事聞かせてほしいってお願いするのもありだぞ」

一瞬、動揺する春樹——亜沙美を見る。

亜沙美、春樹と目が合うが、すぐに春樹が目をそらす——まだ春樹を見ている。

亮「(春樹たちに) おはよう」

春樹たち「おはよう」

亮「聞いてくれよ。亜沙美、告白した人がいるんだって」

奈々「え、誰？ めっちゃ気になる」

亜沙美「（笑って）教えな—い」

奈々「良いじゃん、教えてよ」

しらけた顔をしている春樹—誰も気づいていない。

と、利枝子が小走りで登校してくる。

一瞬、利枝子を見る春樹。

亮、春樹の肩を叩く。

亮を見つめる春樹—険しい顔をしている。

利枝子「はあ、危なく遅刻するところだった
……」

奈々「二学期初日から遅刻なんて嫌だもんね。
それに、利枝子に報告することもあるし」

利枝子「私に？」

奈々「（亮に）亮君にも」

亮「俺？」

奈々「実は、私、今付き合ってる人がいます」

利枝子「誰？」

亮「？」

剛士「俺です」

利枝子と亮「えーッ。いつから」

剛士「もう少しで一ヶ月になるかな」

利枝子「じゃあ、一番ラブラブになりたいと

きじゃん。羨ましい」

春樹「……」

亮「いやあ、でも意外っちゃ意外かもしれないな
いけど、こうして並んでみると、似合っ
てるかもしれないな」

亜沙美「私も、お似合いの人見つけないとな」

春樹、しらけたような顔で立ち上がる

と、出ていこうとする。

亮「どうしたんだ？」

春樹「(素っ気なく) トイレ」

と、出ていく。

奈々「春樹、何か怒ってた？」

亮「夏休みの暮らしに慣れちゃって、朝に弱
くなっただよ。分かりやすい奴だよ」

一人難しい顔をしている亜沙美。

31 アパート・谷島家・居間

倫子が部屋の掃除をしている。

と、玄関のドアの開閉音が聞こえ、夏希が入ってくる。

夏希「ただいま」

倫子「おかえり」

夏希「ハルは？」

倫子「今日から二学期だよ」

夏希「あ、そっか。今日から九月なんだ」

倫子「お店やってると、昼夜が逆になって、

曜日感覚とか日付感覚がズレちゃうんじゃない」

夏希「まあね。(と鞆から封筒を出して)はい、今月の家賃」

倫子「いつもごめんね。今日は、何もそんなつもりで呼び出したんじゃないんだけど……。居候だから、何とか家計を支えていこうと思ってバイトも始めたのに、結局夏

希ちゃんを頼ることになってるから。本当
に、夏希ちゃんには感謝してます」

夏希「そんな改まらないですよ。まあハルは、
いまだに良い顔してないけどね。それで、
話って何？」

倫子「実は、春樹のことで、ちよつと夏希ち
ゃんに相談に乗ってほしくて」

夏希「ハルのこと？」

倫子「うん。この間ね、春樹のクラスメイト
がここに来たの。そしたらその子、春樹に
告白したって言うの」

夏希「へえ。ハルにもとうとう、そういう子
ができたんだ」

倫子「私だって、本当はそうやって感心した
かった。けどね、その子、私が春樹を独り
占めしてるって思ってるらしいの」

夏希「……」

倫子「独り占めなんてさせないって強く言わ
れて、正直応えた……。私は、春樹の言葉
に甘えて、施設の延長みたいな感じで、一

緒に暮らしてるとしか思ってたなかつたから。でもやっぱり他の人から見ると、付き合ってたたり、それなりの関係でいるからこそ、寝食を共にできてるんだろうなって思うんだらうね」

夏希「そっか……」

倫子「私、どうしたら良いかな？ 春樹には、春樹の好きなようにしたら良いって言うんだけど、それが一番困る選択肢なんだよね」

夏希「……」

倫子「私が、春樹の悩みの種になるのも時間の問題かな……」

夏希「もうこの際、独り占めしちゃえば？」

倫子「えッ……？」

夏希「だって、倫子ちゃんはハルのこと好きなんでしょ？」

倫子「いや……好きとか嫌いとか考えたことなかった……」

夏希「そうなのッ？」

倫子「だって、さっきも言ったけど、施設で

過ごした延長だって思ってたから……」

夏希「純粹だね、倫子ちゃんは。とても一度結婚した人とは思えないわ」

倫子「だって、春樹は他の男友達とかとは、また別だもん」

夏希「……」

倫子「多分、春樹も同じ考えじゃないかな。ただ、私に気を遣ってるだけで」

夏希「どうだろうね。意外とハルは、倫子ちゃんのこと（と倫子を見る）」

倫子「（慌てて）やめてよ。春樹に限って、そんなこと……」

夏希「ハルだって一人の男だよ。倫子ちゃんだって一人の女。何も不思議なことはないんだから」

倫子「でも、私そんな風に春樹を見たことなんて……」

夏希「本当に？　一緒にいるところを見ると、カップルというか、夫婦っていう感じするよ」

倫子「そんなこと……」

夏希「まあ、それぐらい一緒にいるんだもん無理ないよね。そういえば、昔、お昼寝の時間の時、二人隣り合わせで眠ってなかったっけ？ その時から、お互いのことを思い始めてたんじゃないの？」

倫子「……」

夏希「二人ともずっと一緒だったから、好きっていう気持ちが無くなって、一緒にいるのがもう当たり前前みたいになってるんだよ、きっと」

黙ってしまった倫子。

32 喫茶店（数日後）

悦子が座って、コーヒーを飲んでる。

と、聡実がやってくる。

悦子「聡実、こっち」

と、悦子の席までやってくる。

聡実、やって来たウエイトレスに、

聡実「カプチーノ一つ」

悦子「ごめんね。急に呼び出して。実は、今度はイタリアにしばらく行くことになったの。そのことを言いたくて」

聡実「また海外行っちゃうんだ……」

悦子「仕事だから、何とも言えないわよ。たまたま聡実と会えて、また別れるのは辛いけど、あんただって今、和哉君って子がいるんだから、幸せじゃない」

悦子「一昨日、和哉君から電話があったの。前に名刺渡したでしょ。私に大事な話があるって言って、電話かけてきてねえ。それで、一昨日、ここの席で和哉君と会ったの」

33 同場所（回想）

和哉と悦子が話している。

悦子「そう……。聡実とねえ……。何となく、そんな気はしてたわ」

和哉「え……？」

悦子「聡実は私の娘よ。何となくだけど、分かる気がするから（と笑う）」

和哉「本当は、聡実のお父さんに、こういう話はしなければいけないとは思ったんですけど、聡実自身がお父さんのことを嫌ってるみたいですから……」

悦子「そうね（と苦笑する）」

和哉「それに、母親は息子のことが大事で、父親は娘のことを大事ってよく言いますから、僕も正直聡実のお父さんには言えなくて……。それで一応お母さんには報告をしとこうと思つて……」

悦子「確かに、聡実は父親に、自分のプライベートを言わないわね、今の生活じゃあ……。けど、そんなことわざわざ、私に報告しなくても良いのに」

和哉「すいません……」

悦子「良いのよ。むしろ、聡実には和哉君みたいなのが、かえって心強いのかもしれないわ」

和哉「お母さん……」

悦子「私には親権がないから、聡実のために

は、何にもしてやれない。寂しい思いをさせてる、酷い母親よ。こんな偉そうなこと言えないけど、あの子には強く生きてもらいたい」

和哉「……」

悦子「家でも学校でも、辛いことはいくらだつてあるかもしれない。でも、あの子にはそれを乗り越えてほしい……」

和哉「……僕が、必ず聡実を守ります」

悦子「優しいのね、和哉君は」

34 同場所（回想戻り）

聡実と悦子が話している。

聡実「和哉君が、そんなことを……」

悦子「幸せ者よ、聡実は。どれほど私が未熟な母親か、すごい考えさせられた」

聡実「……」

悦子「またイタリアに行くつもりだけど、これが最後の海外かな」

聡実「お母さん……？」

悦子「今は海外を拠点にしてるけど、日本に帰って来ても良いかなって。そうしたら、いつでも聡実と会えるじゃない」

聡実「お母さん……」

笑顔で頷く悦子。

35 中央高校・全景（夕方）

36 同・二年A組教室

亜沙美が一人で待っている。

と、春樹が入ってくる。

春樹、冷静な顔をしている。

亜沙美「あのね、春樹……」

春樹「（遮って）ごめん」

亜沙美「……」

春樹「やっぱり、付き合えない……」

亜沙美「春樹……」

春樹「亜沙美が嫌いっていうわけじゃないよ。

気持ちには、物凄く嬉しかった。まさか、こんな俺を好きになってくれる人がいるん

だって」

亜沙美「……」

春樹「剛士と奈々を見てれば、確かに羨ましい気持ちにもなるし、自分も彼女が欲しいなって気持ちになるかもしれないけど、今じゃないというか……」

亜沙美「やっぱり、一緒に住んでるっていう……」

春樹「(遮って) 倫子は違う。亜沙美から見れば、俺を独り占めしている嫌な女に見えるかもしれない。でも俺にとっては、同じ施設で育った大切な家族なの。付き合ってるとか付き合っていないとか、好きとか嫌いとか、そういう関係じゃないの」

亜沙美「……」

春樹「俺たちの立場や関係性も、分かっただけじゃない」

亜沙美「私のことが嫌いってわけじゃないんだよね？」

春樹「当たり前前でしょ。亜沙美は、俺にとっ

て大事なクラスメイトの一人なんだから。
嫌いになるわけがない」

亜沙美「私は、クラスメイトの内の一人としてカウントされてるでしょ」

春樹「そりゃ、亜沙美だって、二年A組の生徒なんだから」

亜沙美「……」

春樹「亜沙美の気持ちは有難くて、嬉しいけど、その気持ちには答えられない」

亜沙美「……」

春樹「だから、ごめん……」

と、頭を下げると、去っていく。

返す言葉もなく、ただ立ち尽くしている亜沙美。

37 同・新聞部室

新聞部の部員たちが、作業をしている。
と、チャイムが鳴る。

春樹「よし、終わろうか。はい、じゃあみんな一回手を止めて。では、お疲れ様でした」

部員たち「お疲れ様でした」

と、それぞれ片付けを再開したり、荷物を持って下校していく部員たち。

春樹も、再びパソコンに向かって、書類を作り始める。

部員A・B「お疲れ様でした」

と、下校していく。

春樹「お疲れッ」

と、利枝子が入ってくる。

部員C「部長」

春樹、利枝子がいることに気が付く。

春樹「どうしたの？」

利枝子「ちよっと、話したいことがあって」

春樹「……」

38 同・二年A組教室

春樹と利枝子が話している。

利枝子「新聞部も、忙しそうだね」

春樹「うん……」

利枝子「あやめ、すっかり私と会話しなくな

った。母親も、最近はやめに店を手伝わせるようになった。少しでも、一緒にいる時間を作ろうとしてるんだと思う」

春樹「あやめちゃんに、出生の事実なんて言うからでしょ。例え血の繋がっていない妹でも、同じ家族なら、家族の気持ちを考えるのが本当でしょ。それなのに、あやめちゃんを傷つけるようなこと言って……。あやめちゃんは、利枝子たちを本当の家族だと思っただけで頼ってきたんだよ。頼れる人じゃない俺や倫子からすれば、甘える親がいるだけでも羨ましいって思うことだってあるのに……。そりゃあ、利枝子の立場になって考えたら、やっぱりあやめちゃんのことを憎いって思うのも当然なのかもしれないけど……」

利枝子「春樹、私の立場も考えてくれたの？」

春樹「だって、友達だから……」

利枝子「春樹……」

春樹「俺、あやめちゃんのことばかり考えてて、利枝子の気持ちも分かろうともしなかった。利枝子だって辛い立場なのに、それをずっと耐えてきたんだと思ったんだよ。そんな利枝子の気持ちも考えないで、俺、悪かったと思ってる。これじゃ、何の友達か分からないよね……」

利枝子「……そこまで、考えてくれてたんだ」
春樹「そろそろ、和解しなきゃとは思ってた……。利枝子は、俺にとって大事な友達の一人だし、俺たちの仲が悪いと、クラスの子にまで影響しちゃう気がしてさ……」

利枝子「私だって、いつまでもこんな状態が続くのは嫌なの。私と絶交する覚悟ができてるって話も聞いたけど、私、友達をこんな形で失うのは嫌。時間が解決してくれるだろうって思ってた、和解するチャンスを狙ってた。だけど、もう待てないと思ったの」

春樹「……」

利枝子「時間に頼ってたなら、いつのことにな

るか分からないでしょ。私が悪いのは、百も承知。だから、もう一度春樹と二人きりで話し合って、仲直りできたらと思ってたんだよ」

春樹「……」

利枝子「夏休みの間に、時間が解決してくれるだろうから、二学期が始まったら、また春樹は普通に、私に話しかけてきてくれると思ってた。でも、春樹は変わらなかったでしょ」

春樹「それは……」

利枝子「分かっている。春樹は、私も春樹のこゝとを嫌ってるって思ってから、声をかけなかったんですよ。こんな状態がいつまでも続いているぐらいだったら、自分から動かないきゃダメだってことに気が付いたの」

春樹「利枝子……」

利枝子「……」

と、松野が難しい顔をして入ってくる。

春樹「先生？」

松野 「春樹、今すぐ生徒指導室に來い」

春樹 「もう少ししたら行きます」

松野 「怒鳴って）今すぐにだッ」

驚いて黙ってしまう春樹と利枝子。

春樹 「（利枝子）ごめん、この続きはまた。

先に帰ってて良いからね」

と、松野と共に出ていく。

39 同・廊下

松野の後に沿って歩いていく春樹――
気づかれないように、その後ろを追っ
ている利枝子。

40 同・生徒指導室

春樹と松野が入ってくる。

春樹 「（おずおずと）失礼します」

と、ソファ―に座っている亜沙美を見
て、驚く春樹。

亜沙美の髪が激しく乱れ、制服やスカ
―ートがボロボロになっている。

松野「(春樹に) まあ、座れ」

春樹「はい……」

と、松野と共にソファーに座る。

生徒指導主任の菊本が入ってくると、

亜沙美の隣に座る。

松野「亜沙美、辛いかもしれないが、もう一

度何があったか、菊本先生に話してくれな

いか」

混乱している春樹。

亜沙美「はい……。ちょうど、五時半の部活

終了のチャイムが鳴ったところです。突然、

谷島君に教室に呼び出されたんです。そし

たら、突然襲われて……」

啞然としている春樹。

菊本と松野が、険しい顔で春樹を見る。

うつむいている様子の春樹。

春樹「……」

菊本「(春樹に) これは、本当のことなのか？

これが本当だったら、ただでは済まされな

いことだぞ。停学処分どころか、最悪の場

合退学処分にもなりかねないんだぞ」

春樹「……」

松野「（春樹に）お前に限ってそんなバカなことはないと思いたいが、正直に話してくれ。どうなんだ」

春樹「……」

亜沙美「……」

春樹「（意を決して）……本当です」

亜沙美「！」

松野「春樹……」

41 同・廊下

話を聞いていた利枝子が啞然となる。

42 同・生徒指導室

春樹「確かに、僕がやりました」

松野「春樹、お前……」

春樹「（冷静に）先生、すいません。二年A組の印象を悪くするようなことをしてしまつて……。 （と菊本に）どんな処分でも

受ける覚悟です」

亜沙美「……」

菊本「そつか。君がそういう気持ちなら良いだろう。谷島君、君には四週間の停学処分を言い渡す。二週間後の学校祭に参加できないのも、覚悟の上のことなんだろうな」

春樹「はい……」

亜沙美「……」

松野「……」

春樹「ご迷惑を、おかけしました」

と、頭を下げると、去っていく。

残念そうな顔をしている松野。

亜沙美「……」

43 同・廊下

春樹が歩いている——何事にも動じないような、冷静な面持ちである。

つづく